

<実践事例>

ユニバーサルデザイン講義を共に創るためには —学生主催による第2回全学FD/SD研修会を実施して—

辻 悠佳¹・雨宮 ゆり²

障がい学生支援をめぐるっては、平成28年4月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行されることが決まるなど、「合理的配慮」についてようやく議論が進められる段階に辿り着いた。京都産業大学では、大学全体で障がい学生支援の理解・啓発を促す等、支援の充実に向けた動きが着実に進んでいる一方、「合理的配慮」をどのように定めるのか、その道筋をつけようと模索が続いている。そのような動きの中で、筆者は、障がい学生当事者の立場から、学内で授業が分かりやすいとの評判が高い教員に協力を依頼し、本学で取り組まれている一歩進んだ「合理的配慮」の事例を紹介する全学FD/SD研修会を企画した。本稿では、研修会の概要を報告するとともに、研修会後のふりかえりで分析したグループディスカッションの模造紙およびアンケート結果から、本学における障がい学生支援の今後の課題と展望について言及する。

キーワード：ユニバーサルデザイン講義、合理的配慮、障がい学生支援

1. はじめに

本章では、研修会実施に至るまでの経緯(1.1.)と研修会の開催を可能にした要因(1.2.)を述べる。

1.1. 研修会実施に至るまでの経緯

障がい者支援をめぐるっては、平成17年の「発達障害者支援法」の施行、平成26年の「障害者の権利に関する条約」の批准書の寄託によって、障害者の人権が保障され、個人の尊厳が尊重される等、法的整備が進みつつある。また、平成28年4月には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行されることが決まっている。この法律は障害者に対して、障害を持たない者と等しく教育を受けることを保障しており、大学において障がい学生に対する配慮が十分になされていなかった環境から、ようやく「合理的配慮」を進めていこうとする段階に辿り着いたといえる。今後、「合理的配慮」に関する議論は、障害者の個別のニーズに対応するため、国レベル、現場レベルでいっそう求められていくだろう。

このような趨勢に応じて、本学では、関係部署が連携して障がい学生支援に取り組んでいる。障がい学生に対する支援内容は、医療行為や心理面

のカウンセリングから大学生活や授業に関わる支援まで多岐に渡るため、ボランティアセンターをはじめ、教学センター、進路・就職支援センター、保健管理センターや学生相談室等、各部署との連携体制が不可欠である。また教育支援研究開発センターでは、FDやSDを通して、大学全体での障がい学生支援の理解・啓発を促しており、全教職員を巻き込んだ支援の充実が目指されている。一方、本学で「合理的配慮」をどのように定めるのか、その道筋はまだ模索段階である。井上他(2013)が指摘するように、教職員への協力依頼や個々の障害の特性に関する認識の普及といった課題は依然として残されたままだ。

筆者は学生生活を過ごしていく上で、このような本学の課題を目の当たりにすることがある。例えば、学期の初回授業で、授業を受ける際に困難があることを含め、教員に配慮していただけるようお願いをしているが、「パソコン上に文字を残すのは、授業の著作権に違反する」と怒鳴られたり、「耳が聞こえなくても、授業が終わった時に先生に質問すれば良いのだから、パソコンタイクを受ける必要はないのではないか」(それでは授業の内容が全部分からない)等、理解を示してくれない教員もいる。

障がい学生に対する支援の必要性を理解しても

¹ 京都産業大学 法学部4年次、² 京都産業大学 学長室・教育支援研究開発センター

raitai,そして、本学に障がい学生が在籍していることすら知られていない現状を変えたい。「合理的配慮」の議論を一步先に進めるには、このような現状の打破が必要であると考え、障がい学生当事者の目線を通した全学 FD/SD 研修会を企画するに至ったのである。

1.2. 研修会の開催を可能にした要因

本研修会の実施に先立ち、平成 26 年 2 月にも障がい学生支援に関する全学 FD/SD 研修会が開催されている。「合理的配慮」を題材としたこの研修会では、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の公布後、大学組織はどのような合理的配慮を定めるべきかについて、全国障害学生支援センターの殿岡翼氏が講演を行い、筆者は障がい学生の立場から、学生生活の中で感じていることを発言した。研修会では大学に進学する障がい学生が増加している現状に対して、教職員がすべき「合理的配慮」について共有できた一方で、プログラムの内容が、大学組織は何をすべきかに重点をおき、障がい学生当事者の視点を十分に組み入れていなかったこと、また、講演形式で進められ、実践事例の紹介がなかったことから、自分が企画するとしたら、「合理的配慮」とはどのようなものか、より具体的に想像しやすい内容にしたいと考えていた。

筆者はこれまで、「障がい学生支援推進団体あすか（以下、あすか）」の代表として、大学等の障がい学生支援の課題を学生の立場から解決するために、学生フォーラムや他大学と情報交換をするイベントを開催してきた。しかし、障がい学生と関わる教職員の実務的な疑問を解決し、「合理的配慮」についてより深い理解を促すという目的を考えたとき、学生が教職員を巻き込んでいくことが効果的であると考え、全学を対象とした FD/SD 研修会という形での実施を試みた。

このような筆者の想いに賛同してくれたのが、教育支援研究開発センター・ボランティアセンター、学生 FD スタッフ AC 燦（以下、AC 燦）である。AC 燦は、京都産業大学の教育や大学の在り方を、学生の視点から改善するために、学生・教員・職員を繋げ、対話を促す活動・イベントを企画・実施している。ファシリテーション技術やアイデア力を推進力として、大学を FD という切り口で良くしていこうとする AC 燦と、大学を障がい学生支援という切り口で良くしていこうとするあすかが結束し、学生主体で障がい学生支援を題材とした研修会を目指すことになった。

本稿では、本学で初めて学生主催によって開催

された全学 FD/SD 研修会について、あすかがどのような意図をもってプログラムを組み立てたかを説明した後、グループディスカッションで使用した模造紙とアンケート結果を分析することによって、障がい学生支援の今後の課題を展望する。

2. 研修会の概要と合理的配慮をかたどるために

本章では、本研修会の概要（2.1.）を説明した後、合理的配慮をかたどるために工夫した点（2.2.）について述べることとする。

2.1. 概要

- ・日時：2014 年 5 月 28 日（水）13:15～17:00
- ・場所：雄飛館 2 階 ラーニングコモンズ
パフォーミングスペース
- ・主催：障がい学生支援推進団体あすか
- ・共催：ボランティアセンター、教育支援研究開発センター、学生 FD スタッフ AC 燦
- ・参加者数：83 名

表 1. 参加者内訳

	学内	学外	計
教員	16(8)	6	22
職員	15(11)	23	38
学生	18(13)	5	23
計	49(32)	34	83

() 内数字は登壇者およびスタッフ数

- ・プログラム
- 13:15 開会挨拶
大城 光正教授（副学長・ボランティアセンター長・外国語学部）
- 13:20 本研修会の目的の説明
辻 悠佳（法学部 4 年次）
- 13:30 ショートムービー上映
- 13:45 模擬授業①
担当教員：久保 秀雄准教授（法学部）
解説：辻 悠佳（法学部 4 年次）
- 14:30 模擬授業②
担当教員：渡辺 達也准教授（理学部）
解説：迫田 亮太郎（理学部 2 年次）
- 15:00 模擬授業③
担当教員：耳野 健二教授（法学部）
解説：北野 美樹（法学部 4 年次）
- 15:30 グループディスカッション
- 16:30 障がい学生を受け持った経験のある教員による「合理的配慮」の実践事例紹介 & 質疑応答

登壇者およびテーマ：

- ①吉永 一行教授（法学部）：聴覚障がい学生が在籍する少人数クラスでの支援方法
- ②山田 勝裕教授（経済学部）：発達障がい者への支援方法
- ③米原 厚憲准教授（理学部）：視覚障がい者への支援方法

16:55 閉会挨拶

佐藤 賢一教授（学長補佐・教育支援研究開発センター長・総合生命科学部）

2.2. 合理的配慮をかたどるために

2.2.1. 障がい学生の実態を共有する

プログラムの冒頭では、本学に在籍する障がい学生が、自らの障害、必要としている支援、趣味等を語る内容のショートムービー（字幕有）を上映した。本学では、障がい学生支援以前に教職員への理解を促す必要があることから、障がい学生それぞれがどのような学生生活を過ごしているのかを見てもらうことで、教職員に筆者たちを身近に感じていただくことを目的とした。

2.2.2. 「ユニバーサルデザイン」像を共有する

通常授業で90分びっしり話すだけだと、全ての学生にとっても分かりづらい。筆者の考えるユニバーサルデザイン講義とは、障がい学生支援を受けながら、通常授業も受けやすい、つまり黒板やスライドで文字化する、指示語を使わない配慮がある形である。そこで、そのような実践を行っている教員が工夫しているポイントを模擬授業で見せることにした。通常授業で用いるレジュメの中からユニバーサルデザインだと思う箇所を選び、15分で説明できるレジュメを作成したり、教員と解説者で何度も事前リハーサルを重ねることによって、想像上と現実の誤差を解消しようと試みた。さらに、通常授業の臨場感をより出すために、スライドや板書を増やす等の工夫を重ねていった。

また、単に授業の特徴を紹介するにとどめず、教員の工夫を障がい学生自ら解説した。例えば、法学部久保秀雄准教授は、「重要語句をスライドに出す」、法学部耳野健二教授は、「板書を中心に学生の様子を見ながら、丁寧に話す」、理学部渡辺達也准教授は、「障がい学生に板書ノートを事前に渡す」といった点を授業づくりで心がけておられるが、これらの配慮が障がい学生にとってどれだけありがたく、授業の理解に役立っているのかを伝えた（図1参照）。

模擬授業を通して、参加者に「合理的配慮」の具体的な事例を紹介したことで、自分でもすぐに取り入れられそうな実践を持ち帰ってもらい、参加者がユニバーサルデザイン講義に近づける第一歩を作り出したと考えている。



図1. 模擬授業

2.2.3. 「ユニバーサルデザイン」像を深める

続いて、模擬授業で共有した「ユニバーサルデザイン」像をより深く考えてもらうために、学生・教職員を交えて、グループディスカッションを行った。各々のテーマの目的は、以下の通りである。テーマ①「ゼミなどでの少人数講義での支援方法」は、少人数講義において、障がい学生および障がい学生を支援する学生にとって受講しやすい講義は何かを考えること、②「英語などの語学授業での支援方法」は、障害によっては受講が困難な学生をどのように支援できるか考えること、③「実験などでの支援方法」は、理系教員が懸念している、障がい学生が受講しやすい環境を考えること、④「ユニバーサルデザイン講義の理想」



図2. グループディスカッション

は、参加者の考えるユニバーサルデザイン講義を知り、ユニバーサルデザイン講義の形について今後も継続して議論していく材料とすることである。話し合いの結果は各グループで模造紙にまとめ、最後に全体で共有した（図2参照）。

最後に、障がい学生（聴覚・発達・視覚）を受け持った経験のある本学教員3名が、障がい学生支援の方法について自身の実践事例を紹介した。法学部吉永一行教授は、少人数クラスで自己紹介する際に、全員に氏名と趣味を書いてもらった上で発表する方法を紹介した。これは、障がい学生に限らず、他の学生にも氏名等が正確に伝わるように先生が工夫されている方法である。経済学部山田勝裕教授からは、パワーポイントのスライドに文章だけでなくアニメーションを用いることによって、視覚的に見てイメージしやすいように工夫していることが紹介された。理学部米原厚憲教授は、障がい学生を初めて受け持った時に、障がい学生本人からの申し出を受けて、ボランティアセンターに相談したことにより、障がい学生にとってもわかりやすい授業を創るにはどうすればいいのかということ意識するようになったという。障がい学生と教員の間にボランティアセンターを加えた三者が連携をとれるということは、本学の障がい学生支援の特徴の一つであろう。

このように、本研修会では、全ての学生にとってわかりやすい講義へと参加者を近づけるために、各プログラムを段階的に構成した。障がい学生について知ってもらった上で、ユニバーサルデザインの形を全体で共有することで、最終的に、参加者が新たな気づきを得て、自分なりの「合理的配慮」の形をかたどれるようになったと考えている。

3. 研修会の検証

本章では、グループディスカッションで出された意見について、あすかと AC 燦で整理した結果（3.1.1.）と分析（3.1.2.）を述べたい。さらに、研修会終了後回収したアンケートの分析から、本研修会の成果と課題に言及する（3.2.）。

3.1.1. 模造紙の整理

テーマ①「ゼミなどの少人数講義での支援方法」は教員と学生の距離が近いゼミがテーマであることから、双方が話し合い、よりよい解決策を提案してもらうために、教職員・学生のグループ分けにした。（表2参照）。

表2. テーマ①の参加者内訳

	教員	職員	学生	計
学内	6(文系6)	2	0	8
学外	1	6	1	8

テーマ①では、学生・教員お互いが歩み寄る環境を理想とし、そのためには障がい学生本人とゼミ生間で遠慮させない関係を作る必要があることが話された。この課題に対するゼミ内での解決策としては、「障がい学生との対応を把握している教員が、接し方のモデルを見せること」、「障がい学生本人からの発信」、「教員が解決するのではなく、ゼミ生自身で解決策を考えてもらう」といった意見が出された。また、大学全体に関わる解決策としては、「学生・教職員で考える機会（例：PBL）をつくる」、「人権研修等で障害に関する知識や情報を得る機会をつくる」、といった意見が出された（図3参照）。

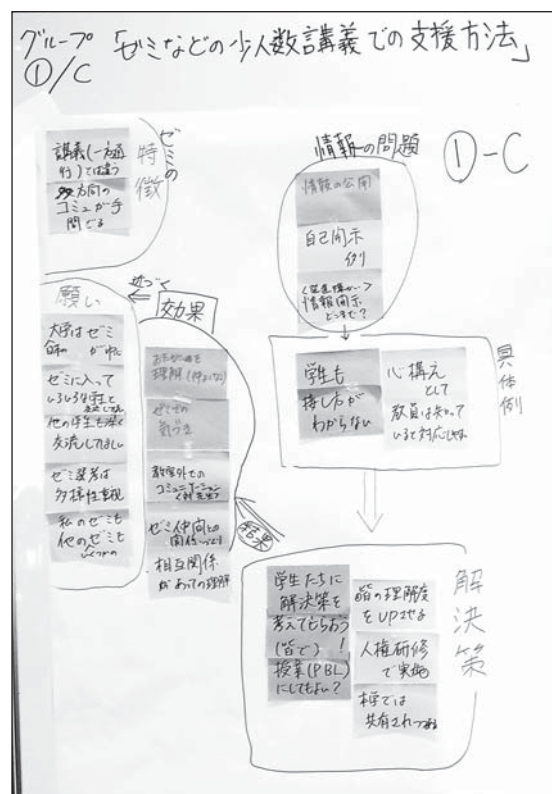


図3. 「ゼミなどの少人数講義での支援方法」のグループで作成された模造紙

テーマ②「英語などの語学授業での支援方法」と③「実験などでの支援方法」は、教室設備や授業改善に関わる意見が出るだろうと予測されたため、教職員のみでグループを構成した（表3参照）。

表 3. テーマ②の参加者内訳

	教員	職員	学生	計
学内	1	1	0	2
学外	2	5	0	7

テーマ②では、(1) 授業進行の注意、(2) 補助教材の配布、(3) 教室環境の整備、(4) 大学組織での検討事項について視覚障害・聴覚障害それぞれに合った支援方法が提案された。

(1) 授業進行の注意と (2) 補助教材の配布で出された意見には、例えば、視覚障害に対して、「教科書への図表の貼付」、「講義資料の点訳化」の必要性があることや、聴覚障害に対して、リアクション・ペーパーを使えば状況を理解することができる等、障がい学生だけでなく、受講生全員にとってわかりやすい授業づくりのための方法が挙げられている。一方、(3) 教室環境の整備と (4) 大学組織での検討事項は、個々の教員の努力を超えて、各障害に応じて「合理的配慮」が行えるように、大学の障がい学生支援体制の整備が必要であることを示している (表 4 参照)。

テーマ③「実験などでの支援方法」では、学外の教職員が集まった (表 5 参照)。

表 5. テーマ③の参加者内訳

	教員	職員	学生	計
学内	0	0	0	0
学外	1	4	0	5

テーマ③では、(1) 教室設備の配慮、(2) 授業運営における配慮について、発達障害・視覚障害・聴覚障害それぞれに合った支援方法が提案された。

(1) 教室設備の配慮では、視覚障害に対しては「照明を十分にする」などの具体策が提案された。(2) 授業運営における配慮では、実験の補助に関して意見が多く出された。具体的には、TA 等の設置や実験経験のある先輩によるサポート等である。一方、教員ができる支援としては、「実験の流れをパワーポイントで示す」、「シンプルかつストレートに、数字などを入れて具体的に話す」等、授業改善に関する意見が出された (表 6 参照)。

以上のように、テーマ③では実験などでの支援方法について、具体的な意見が挙げられたが、教員自身が授業の質を高めること、また、教員の授業改善の取り組みに対して、大学としても最大限のサポートをすることによって、障がい学生支援体制の充実に繋がるという点でテーマ②と共通している。

表 4. テーマ②で出された意見

英語等の語学授業での支援方法		
	視覚	聴覚
授業進行の注意	言語情報のみでの授業 (板書は不可) タスクの流れについての事前説明	授業の進行状況の説明
補助教材の配布	教科書への図表の貼付 (補助者が障がい学生に説明しやすくなるため)	リアクション・ペーパーでの状況理解 (障がい者だけではなく全員対象)
	ハンドアウトの事前配布	文字化可能な文書の全文字化
	視覚以外の教材の使用 (音声・実物)	字幕付与
	資料の文字サイズにおける配慮 (拡大コピー等)	
	文字データのテキストデータ化 (音声読み上げソフトで聞けるようにするため)	
教室環境の整備	講義資料の点訳資料化	
大学組織での検討事項	(使用教室の明るさによっては) LEDライトの使用 試験時間の延長	PCが使える環境の整備 (コンセント・Wi-Fi) 他の科目への振替 (コミュニケーション系授業は受講不可のため)

表 6. テーマ③で出された意見

実験等での支援方法	
教職員の質の向上→支援体制の充実	
教室設備の配慮	実験台の高さに配慮する (肢体)
	照明を十分にする (視覚)
	危険な場所や危険物は黄色などの目立つ色で表示する
授業運営における配慮	TA等を配置する
	実験経験のある先輩がサポートする
	実験の流れをパワーポイントで示す
	ディスプレイやメモを使って表示する
	シンプルかつストレートに、数字などを入れて具体的に話す (視覚)

テーマ④「ユニバーサルデザイン講義の理想」は学生から見たユニバーサルデザインはどのようなものであるかを知るために、学生のための振り分けにした（表7参照）。

表7. テーマ④の参加者内訳

	教員	職員	学生	計
学内	0	0	0	0
学外	0	0	6	6

テーマ④では、ユニバーサルデザイン講義の実現を阻む要因として、「マスクをしている先生がいると唇が見えず読み取りにくい」、「聴覚に障害があっても、手話が分からない人もいる」ということが挙げられた。それらの解決策には、「動画に字幕をつける」、「言葉に配慮する」、「拡大印刷・点訳をする」等があり、「情報を得るための多様が必要だ」という結論が出ている。

このように、グループ④では主に学生から教員に対する「要望」が多く見受けられる結果となったが、これはグループの構成員が聴覚障がい学生やその支援に関わる学生であったためではないだろうか。この点については、今後同様のテーマを多様なメンバーで議論することによって、「ユニバーサルデザイン講義の理想」への示唆が得られるだろうと考えている。

3.1.2. 模造紙の分析

前節で行った模造紙の整理を踏まえて、各テーマについて分析を行いたい。

まず、テーマ①は課題・解決策が言及されているにも関わらず、「学生が何をすべきだ」、「教員が何をすべきだ」というように互いに一方向的な意見を向ける傾向がみられた。「参加者自身が何をすべきか」という視点が欠けているのは、「情報開示」が不十分であることが一因だと推測される。例えば、障がい学生本人からどのような障害の程度であるか等の情報について、ボランティアセンター等の障がい学生支援に関わる部署に伝えていたとしても、障がい学生本人が教員や学生に対して情報開示を望んでいないケースもある。このように障がい学生支援をとりまく学生・教職員すべてに情報が行き届いていない場合、歩み寄りや何でも言える関係が大切だといっても難しいのではないだろうか。

そこで筆者は障がい学生・教員・ゼミ生、この三者がどのような相互作用をすればゼミで関係をうまく築けるかを考えた（図4参照）。まず、障が

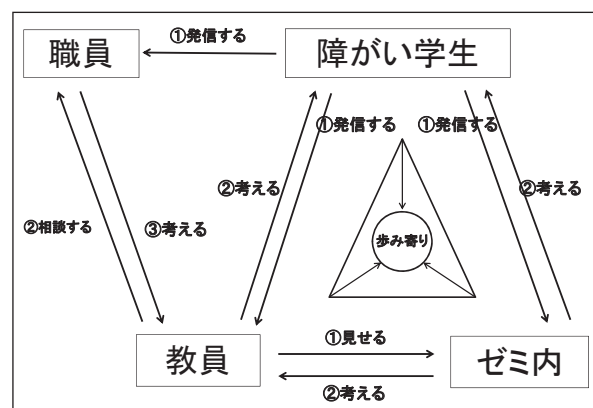


図4. 教職員・学生のつながり

い学生は、個人の顔が見渡せるゼミの場合、教員とゼミ生に可能な範囲で自分の障害を「発信する」ことによって、教員とゼミ生が対策を「考える」ことができる。そして、障がい学生を受け持つ教員は、障がい学生との接し方のモデルをゼミ生に「見せる」ことによって、ゼミ生自身にもより良い接し方はないか考えてもらうことができる。このように三者が相互に働きかけてこそ、バラバラだった三者が「歩み寄り」ができると思われる。また、障がい学生から教職員にも「発信する」ことができれば、教員は職員（ボランティアセンター等）に「相談する」ことができ、共に対策を「考える」ことができるだろう。

その他のテーマについても、同様に「自分はどうするか」という当事者としての意見はみられなかった。とりわけ、テーマ④では、「情報を得るための手段の多様が必要」であるという話がなされたのにも関わらず、学生自身が現状の打開に向けて主体的に関わろうという意識が薄いように見受けられた。

以上の分析により、学生・教員・職員いずれにも当事者意識が根付いていないという課題が浮き彫りになった。たとえ情報公開の制約によって、すべての情報を知りえないとしても、いかに「自分ごと」として障がい学生支援に関われるかが、その壁を乗り越えるカギとなるだろう。

3.2. アンケート結果の分析

模造紙を整理したことで、学生・教職員が共に授業を創り上げようという意識の醸成が必要であることがわかった一方、アンケート結果の分析からは、本研修会の成果も明らかとなった。

本研修会の成果の一つは、「障がい学生および障がい学生支援の現状を知ってもらう」「障がい学生の視点を伝え、実務的な課題を解消してもらう」「合理的配慮の在り方についてイメージをもって

もらう」「ユニバーサルデザイン講義について考えを深めてもらう」というあすかの意図が、各プログラムを通じて参加者に伝わったことである。例えば、「実際の模擬授業を通して、具体例を知ることができた」等の意見から、参加者はまさに「現場を知る」ことができた。また、それを障がい学生自らが企画し伝えたことに対して、「障がい学生の視点から見た授業の様子に気付いた(教員)」「学生の生の声が聞けた(職員)」と評価されていることも意義深い。

さらに、本研修会の大きな成果として、「授業は教員のみで創られるもの」ではなく、より良い授業を創るために「自分に何ができるか」を考えてもらうきっかけを与えられたことが挙げられる。例えば、「普段使いがちな指示語や説明方法が、障がい学生にとって分かりづらいと感じた(職員)」「障がい学生が理解できる伝え方であれば、全ての学生が理解できる(学生)」といったように、障がい学生の視点から普段の授業はどう見えるかを共有したことによって、障がい学生と向き合うために何が大切か気づきを与えることができた(表 8-1 参照)。

一方で、「学生・教職員それぞれの視点から意見を出し合うこと」や「障がい学生支援の協力体制の強化」という具体的な課題も挙がっている。し

かし、それらは職員のみ意見から抽出されたものであり、ここでも障がい学生支援に対する当事者意識の欠如という課題が透けて見える。参加者の教員がアンケートで「現場を知った上での知恵の出し合いが大切である」と記述している通り、今後も障がい学生支援の必要性に対する理解を促す取組を継続するとともに、全ての学生にとって分かりやすい授業をどのように創ってイけるか、学生と教職員が対話できる場を作る取組も必要である(表 8-2 参照)。

4. 本研修会の意義と今後の課題・展望

先の章で述べたとおり、本研修会の意義としては、障がい学生の視点を知ってもらった上で、「合理的配慮」のイメージを共有できたこと、また、学生・教員・職員が意見を出し合うことで、「自分にできることは何か」を考え始めるきっかけを掴めたことが挙げられる。本研修会を通して、参加者は「合理的配慮」に取り組んでいくためのスタートラインに立ったといえるのではないだろうか。

しかし、学生・教員・職員で授業を創っていく風土を根づかせるという課題が見つかったことも事実である。今後は、三者が対等に意見を出し合える場を作り、学教職が共により良い大学を目指

表 8-1. あすかが意図したことと参加者が得た気づき

	1. 意図：障がい学生および障がい学生支援の現状を知ってもらう → 気づき：現場を知ることができた
教員	現場を知った上での知恵の出し合いが大切である
職員	授業における工夫を知ることができた 実際の模擬授業を通して、具体例を知ることができた 学習環境の充実、職員としての支援方法について様々な支援があることに気付いた
学生	障がい学生への授業の仕方・接し方を知ることができた
	2. 意図：障がい学生の視点を伝え、実務的な課題を解消してもらう → 気づき：障がい学生当事者の声を聞くことができた
教員	障がい学生の求めていることに気付いた 障がい学生の視点から見た授業の様子に気付いた 学生の率直な意見・様々なタイプの模擬授業、障がい学生への配慮に触れることのできる豊かなプログラムだった
職員	障がい学生の要望を聞くことができた 学生視点からの障がい学生支援について新たな気づきを得た 学生の生の声が聞けた
学生	障がい学生を身近に感じられた
	3. 意図：合理的配慮の在り方についてイメージをもってもらう → 気づき：障がい学生支援は全ての学生のためでもあることがわかった
職員	障がい学生用ではなく、どの学生にもわかりやすい内容・手段を工夫することが大切である 全ての学生にとってわかりやすい授業をすること、障がい学生への配慮は同じベクトルを向いている
学生	障がい学生支援は全ての学生のために＝「ユニバーサルデザイン」
その他	障がい学生が理解できる伝え方であれば、全ての学生が理解できる
	4. 意図：ユニバーサルデザイン講義について考えを深めてもらう → 気づき：自分に出来ることが何かを考えることができた
教員	授業スタイルの工夫や配慮などをもっと努力したい 障害のある・なしに関わらず、弱み・強みを活かしていきたい 支援とともに障がい学生の主体性を育てる事が大事である 自分の授業を客観的に考えるきっかけになった ICT (Information & Communication Technology) が重要である より配慮の必要性を感じた
職員	普段使いがちな指示語や説明方法が障がい学生にとって分かりづらいと感じた
学生	自分のPCスキルが誰かのためになることは良いことだ

表 8-2. 今後の課題

	学生・教職員それぞれの視点から意見を出し合うこと
職員	学生・教員・職員、様々な視点で分かりやすかった 学生・教員・職員、それぞれの立場で意見を言える場が大切である 教員の意識について聞くことができた 職員と学生とのコミュニケーションの重要性に気付いた
	障がい学生支援の協力体制の強化
職員	協力的な教育によって、どんな学生にも受けやすい授業になる 教員の取り組み、配慮があることは、支援体制づくりに影響する

すための風土を作る段階へと進んでいかなければならない。

具体的には、継続的な研修会の実施および別のツールを用いた普及を考えている。前者については、今回の研修会ではユニバーサルデザイン講義をテーマに挙げたものの、障害には様々な種類がある。支援の形に一つの正解はないことから、今後は他の障害事例も取り上げて理解を促していきたい⁽¹⁾。後者については、新任教員向けにDVDを制作し閲覧していただくことを検討している。初回授業で障害について教員に説明する際、教員の理解を得やすくなれば、障がい学生支援への理解もいっそう深まると考えられる。

一方、全学FD/SD研修会で障がい学生支援を題材として取り上げるだけでは、自分には関係ないと思う教職員の関心を向かせることはできない。学教職が主体性をもってユニバーサルデザイン講義の実現を目指せるように、今後も、AC 燦をはじめ、学内を巻き込みながら障がい学生支援を推進していきたい。本研修会で、当事者意識の醸成という新たな課題が見つかったけれども、筆者は障がい学生支援の展望は暗くないと考えている。ユニバーサルデザイン講義の実現にはいくつかのハードルがあるが、アンケートにも記されていた通り、目前にある課題に対して「小さな積み重ね」をしていけば、実現できないことはないだろう。学教職が足並みを揃え、三者の壁をなくして一丸となれるよう、引き続き、あすかは障がい学生支援の推進を目指して活動を展開していきたい。

本研修会の企画・実施に関わった学生メンバー

【障がい学生支援推進団体あすか】

- ・辻 悠佳（法学部4年次）：あすか代表
- ・北野 美樹（法学部4年次）
- ・鈴木 佳奈美（理学部4年次）
- ・佐藤 一樹（経済学部3年次）
- ・迫田 亮太郎（理学部2年次）

【学生FDスタッフAC「燦（SAN）」】

- ・林 隆二（法学部4年次）
- ・竹谷 美里（経営学部3年次）
- ・若宮 健（総合生命科学部3年次）

本文中の役職・学年は、2014年11月29日現在

注

- 1) 本研修会終了後、あすかとAC 燦の主催で発

達障がい学生支援に関する全学FD/SD研修会が開催されている。

参考文献

- 井上友裕他（2013）京都産業大学の障がい学生支援体制の特色と課題—障がい学生支援FD/SD活動を通して—。高等教育フォーラム 4:pp.123-127

To Make Universal Design Lecture Together: The Student-based Second University-wide Faculty Development/Staff Development Workshop

Yuka TSUJI¹, Yuri AMEMIYA²

Regarding support for students with disabilities, the "Law for Promotion of Discrimination Resolution on the grounds of Disabilities" is to be enforced in April, 2016. The law ushers in the phase of discussing "reasonable accommodation", while how it should be performed remains a matter of debate. Under these circumstances, Kyoto Sangyo University promotes a university-wide support system for students with disabilities, although improvements are continually being made to expand the understanding for such system.

This paper reports on the student-based Second University-wide Faculty Development/Staff Development Workshop, held on May 28, 2014, to introduce an example of "reasonable accommodation". It analyzes the ideas delivered by the group discussion and the result of the surveys collected after the workshop. As a conclusion, achievements and problems of the workshop became apparent, and the report looks toward the bright future that paves the way to a better support system for students with disabilities in Kyoto Sangyo University.

KEYWORDS: Universal Design Lecture, Reasonable Accommodation, Support for Students with Disabilities

2015年2月23日受理

¹ Faculty of Law, Kyoto Sangyo University

² Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University